

# 連体修飾節内の潜在的な主要部内在型関係節

九州大学文学部

言語学・応用言語学専門分野

2017（平成 29）年 3 年次編入学

1LT15172G

原田 祐介

2019（平成 31）年 1 月提出

## 要旨

本論文では、従来、「外の関係」の一種とみなされてきた連体修飾節が、主要部内在型関係節を含んでいるという分析を提案する。たとえば、「女子大生が彼氏にしたい大学」という表現は、その解釈を考えると、「女子大生が彼氏にしたい男性」という「内の関係」の関係節と、「その男性の大学」という連体格関係（A の B）の両方を内包している。本論文では、このような連体修飾の構文を節型連体格関係と呼び、その構造について考察した。3章では、節型連体格関係の連体修飾節は、そのものが主要部内在型関係節であること、そして、さらにその主要部が空範疇となる場合もあることを主張する。この節型連体格関係の主要部内在型関係節は、「の」が後続せず、名詞に直接先行する位置に現れている。従来の主要部内在型関係節の分析は、「の」の存在に依存しており、この節型連体格関係には適用することができないため、本論文の発見は主要部内在型関係節に対する新しい分析の必要性を示すことになる。

<b>1. 問題提起</b> .....	<b>1</b>
<b>2. 主名詞が項ではない連体修飾</b> .....	<b>3</b>
2.1. 加藤 (2003) .....	3
2.2. タイプ⑨の連体修飾 .....	4
2.3. 位置関係を表す名詞 .....	5
2.4. 随伴物を表す名詞 .....	7
2.5. 命題内容を表す名詞 .....	8
2.6. まとめ .....	9
<b>3. 提案</b> .....	<b>10</b>
3.1. 連体修飾節内の主要部内在型関係節 .....	10
3.2. 潜在的な主要部内在型関係節 .....	11
3.3. 多義的な連体修飾 .....	12
<b>4. 主要部内在型関係節の分析</b> .....	<b>13</b>
4.1. Harada (1973) .....	13
4.1.1. <i>tokoro</i> -complement .....	13
4.1.2. 分裂文 .....	13
4.1.3. 受動文 .....	14
4.1.4. 自動詞の場合 .....	15
4.2. Kuroda (1992) .....	16
4.2.1. 'Pivot independent relative clause' .....	16
4.2.2. 古典日本語 .....	16
4.2.3. 現代日本語 .....	17
4.3. Uchibori (1991) .....	18
4.3.1. 束縛による分析 .....	18
4.3.2. 観察と説明 .....	18
<b>5. おわりに</b> .....	<b>21</b>

## 1. 問題提起

日本語の連体修飾には、次のような例がある。

- (1) a. [女子大生が彼氏にしたい]大学  
b. [x 軸と曲線で囲まれた]面積

もちろんのことながら、「女子大生が〇〇大学を彼氏にしたい」わけでもなければ、「x 軸と曲線で面積が囲まれている」わけでもない。つまり、この連体修飾では、主名詞が連体修飾節の中の項として働いていないのである。

日本語の連体修飾は、主名詞が項として働く場合（内の関係）と項ではない場合（外の関係）があると、しばしば指摘される（寺村 1977ab, 1980）。

- (2) 「内の関係」  
a. 授業に遅刻した学生  
b. ジョンが書いた論文  
c. メアリーが住んでいる家

- (3) 「外の関係」  
a. サンマが焼ける匂い  
b. ドアを閉めた音  
c. 熊が襲ってくる恐怖

2章で述べるように、従来、(1)のような例文は「外の関係」の一例として他の連体修飾とひとまとめにして扱われてきた。

しかし、(1)は(4)と同じ解釈である。(4)は、[ ]部分と□□が「内の関係」を成し、□□と本来の主名詞の「大学」が連体格の関係になっており、ここには「外の関係」に見られる曖昧さはどこにもない。確かに、(1)は、(4)と同じ意味が [ ]部分の節のみで表現されているという点が特徴的であるが、解釈から見て、他の「外の関係」の連体修飾節とは一線を画すべき構文である。

- (4) a. [女子大生が彼氏にしたい]男性の大学  
b. [x 軸と曲線で囲まれた]部分の面積

本論文では、この(1)のようなタイプの構文を、以下、「節型連体格関係」と呼ぶことにし、なぜ、このような形式で(4)と同じ解釈をすることができるのか考察する。以下、2章では、

まず、節型連体格関係について、どのように記述されてきたかを述べ、3章以下で、本論文の提案を行う。

## 2. 主名詞が項ではない連体修飾

### 2.1. 加藤（2003）

加藤（2003）は、日本語の連体修飾に関して非常に広範囲のデータを観察し、その記述を行なっている。加藤（2003）は、寺村（1977ab, 1980）で議論された「内の関係」「外の関係」という2分類に対して、より細かい分類が必要であると述べている。

加藤（2003）の分類は以下のとおりである。（ここで「文に開く」とは、連体修飾となっている節を述語としての節に転換させることを指している。）

(5) タイプ①：主名詞に格助詞をつけて文に開いても適格で、格助詞が排他的に一つに決まるもの

- a. 授業に遅刻した学生
- b. その学生が授業に遅刻した。

タイプ②：主名詞に格助詞をつけて文に開いても適格であるが、格助詞がひとつに決まらないもの

- a. 夕陽を眺めた丘
- b. その丘から夕陽を眺めた。

タイプ③：主名詞に格助詞をつけて文に開くことは可能であるが、格助詞の代わりに「は」を用いる方が明らかに自然なもの

- a. 緑が多い町
- b. その町が緑が多い。
- c. その町は緑が多い。

タイプ④：主名詞に格助詞をつけて文に開くことは可能であるが、格助詞の代わりに文法化した格助詞的要素をつけた方が明らかに自然なもの

- a. 佐藤さんが文句を言っていた写真
- b. その写真に佐藤さんが文句を言っていた。
- c. その写真について佐藤さんが文句を言っていた。

タイプ⑤：主名詞に格助詞類をつけて文に開くことは可能であるが、格助詞の代わりに動詞など別の要素を補った方が明らかに自然なもの

- a. 大笑いした彼の失敗談
- b. 彼の失敗談で大笑いした。
- c. 彼の失敗談を聞いて大笑いした。

タイプ⑥：主名詞に格助詞をつけて文に開くことはできないが、格助詞の代わりに文法化した格助詞的要素を用いれば文に開けるもの

- a. 増田君が話していた洋服
- b. \*その洋服を増田君が話していた。

- c. その洋服について増田君が話していた。

タイプ⑦：主名詞に格助詞をつけて文に開くことはできないが、格助詞の代わりに動詞など別の要素を補えば文に開けるもの

- a. 夜ひとりでトイレに行けなくなる怖い話  
b. \*その怖い話で夜一人トイレに行けなくなる。  
c. その怖い話を聞くと、夜一人でトイレに行けなくなる。

タイプ⑧：主名詞に格助詞をつけて文に開くことはできないが、格助詞の代わりに「は」を用いれば文に開けるもの

- a. 兄がアルバイトしたお金  
b. そのお金は兄がアルバイトした。

タイプ⑨：主名詞に格助詞をつけて文に開くことはできず、他の要素を用いても文に開くことが不可能なもの

- a. 十分な議論がないままにそういう制度が導入された結果

[cf. 加藤 2003: 216]

このうち、タイプ①②がいわゆる「内の関係」に相当し、③～⑨がほぼ「外の関係」に相当する。この分類によると、節型連体格関係はタイプ⑨ということになる。この章の残りでは、加藤（2003）がタイプ⑨の連体修飾について、どのように記述しているか、まとめておく。

## 2.2. タイプ⑨の連体修飾

タイプ⑨の連体修飾の典型例として挙げられているのは、次のようなものである。

- (6) a. 意気消沈した様子  
b. 倉敷に泊まった翌朝  
c. 橋を渡ったところに交番があるから、そこで聞いてください。

[加藤 2003: 219, (38)(39)(40)]

このタイプ⑨の連体修飾節の主名詞となっているのは、相対名詞である。以下に相対名詞として寺村（1977b: 287-296）で挙げられた例の中から加藤（2003）が引用したものを列挙する。

- (7) 上、下、前、後、向こう側、先々、前日、のち、翌日、帰り、跡、途中、背後、横、隣り、反面、一方、ほか、代わり、最初、最後、当日、当座、中、渦中、仲、相手、理由、原因、要因、結果、拍子、残り、おつり、余り、はずみ、報酬、煙、勢い、

動揺、ショック、傷あと、指跡、よごれ、名残り、形跡、たたき、罰、静けさ、涙、淋しさ、落ちつかなさ、焦り、不安、おかしさ、心許なさ

[加藤 2003: 219]

加藤（2003）は、これらの名詞を、連体修飾節に対して持っている意味に基づき、大きく以下の3つに分類している。

- (8) a. 位置関係を表す名詞
- b. 随伴物を表す名詞
- c. 命題内容を表す名詞

以下、順に説明を加えていく。

### 2.3. 位置関係を表す名詞

「位置関係を表す名詞」は、空間的な位置関係を表す場合と時間的な前後関係を表す場合とがある。

- (9) a. 国鉄が走っている下に駐車場を作ることにした。

[井上 1976: 193]

- b. 私たちが勉強している上で誰かが柔道の練習をしていた。

[寺村 1977b: 287]

- c. 車がどんどん走り抜けていく横をカルガモたちは悠然と歩いていた。

[加藤 2003: 220, (46)]

いずれの主名詞も単に「下」「上」「横」と言っただけでは意味がわからないことから、位置関係を指し示す際の基準となる要素、つまりは修飾要素が先行しなければならないと加藤（2003）は言う。

- (10) a. 美智子は本を読んでいた。（その）横で浩治は昼寝をしていた。
- b. 美智子が本を読んでいる横で浩治は昼寝をしていた。

[加藤 2003: 220, (47)(48)]

- (11) a. 兄がイタリアから帰国した。その翌日、東京は大雪になった。
- b. 兄がイタリアから帰国した翌日、東京は大雪になった。

[加藤 2003: 221, (54)(55)]



(10a)と(11a)では、「美智子は本を読んでいた」「兄がイタリアから帰国した」という先行する文が、「横」「翌日」に実質的な意味的修飾を行なっている。(10b)と(11b)は、機能的に修飾する形をとったにすぎず、あくまで、意味的修飾が成立しなければ、連体修飾の形をとっても文は不適切になる。

- (12) a. \*美智子が東京に出張した。その横で浩治は昼寝をしていた。  
b. \*美智子が東京に出張した横で、浩治は昼寝をしていた。

[加藤 2003: 221, (49)(50)]

- (13) a. \*敏江はイタリアにあこがれていた。その翌日、武史はベネチアンサングラスを買って帰った。  
b. \*敏江はイタリアにあこがれていた翌日、武史はベネチアンサングラスを買って帰った。

[加藤 2003: 221, (56)(57)]

すなわち、位置関係を表す名詞に対する修飾節は基準となる位置を表しており、実質的に名詞に相当する機能を有していると加藤(2003)は指摘する(加藤 2003: 233, (117))。その上で、次のような制約も主張されている。

(14) 位置関係を表す名詞の意味的制約

位置関係を表す名詞は《基準》として解釈するのに十分な意味的限定がなされていなければならない。

[加藤 2003: 223, (68)]

意味的に限定する要素は、位置関係の名詞に先行して文中に存在している必要はない。

- (15) a. 隣で騒ぐなよ。僕は勉強に集中したいんだ。  
b. リモコンなら、ほら、横に置いてあるじゃないか。  
c. 近くに、おいしいレストランがあります。

[加藤 2003: 221, (51)(52)(53)]

これらの例では、言語外的な要因によって位置関係の名詞の基準が決まっているため、容認性が低くならないのである。

## 2.4. 随伴物を表す名詞

次に、随伴物を表す名詞を修飾する連体修飾節について見ていく。加藤（2003）では、修飾節が表す動作や出来事のプロセスのどこかで生じるものを随伴物と呼び、その修飾節が修飾している名詞を「随伴物が表す名詞」と呼んでいる。この随伴物が生じるとされるプロセスについては、当該の動作や出来事がなされる前の段階、なされている途中の段階、なされた後の段階の3つに分け、それぞれを原因随伴物、過程随伴物、結果随伴物と呼んでいる。以下に、加藤（2003）が挙げている、3つの段階で生じる随伴物が表す名詞を含んだ連体修飾節の例をまとめておく。

### (16) 原因随伴物（なされる前の段階）

- a. 円高が進む原因
- b. 円高が進んだ原因

[加藤 2003: 226, (80)]

- c. 彼女が彼と結婚する理由
- d. 彼女が彼と結婚した理由

[加藤 2003: 226, (96)]

- e. \*コンパにでかける帰り
- f. コンパにでかけた帰り

[加藤 2003: 226, (81)]

### (17) 過程随伴物（なされる途中の段階）

- a. 誰かが階段を下りる音がした。
- b. ?誰かが階段を下りた音がした。
- c. 誰かが階段を下りている音がした。
- d. 店内には、そばを打つ音が響いていた。
- e. \*店内には、そばを打った音が響いていた。

[加藤 2003: 226, (84)]

[加藤 2003: 226, (85)]

- f. さんまを焼く煙
- g. さんまを焼いた煙

[加藤 2003: 226, (86)]

- h. さんまが焼ける匂い
- i. さんまが焼けた匂い

[加藤 2003: 226, (87)]

(18) 結果随伴物（なされた後の段階）

- a. たばこを買ったおつり
- b. \*たばこを買うおつり

[加藤 2003: 225, (77)]

(16)–(18)に示すように、連体修飾節中の動詞と主名詞である随伴物を表す名詞との関係から、動詞のAspectが適切に選択されている必要がある。その関係は、以下の表のようにまとめられる。

(19)

	修飾節の動作の段階	修飾節中の動詞のAspect
原因随伴物	その動作や出来事が行われる前の段階	指示対象のある動作や出来事（タ形が完了、非タ形が未完了）
		指示対象のない動作や出来事（非タ形で用いる）
過程随伴物	その動作や出来事が行われている段階	非タ形（ル形・テイル形）
結果随伴物	その動作やできごとが行われた後の段階	タ形

[加藤 2003: 230]

## 2.5. 命題内容を表す名詞

加藤（2003）は、主名詞が位置関係の名詞でも随伴物を表す名詞でもない場合をまとめて「命題内容を表す名詞」としている。命題内容を表す名詞の場合、「という」の介在が可能な場合がある。

- (20) a. エジソンが電球を発明した話
- b. エジソンが電球を発明したという話

[加藤 2003: 230, (98)]

ただし、「という」が介在しなければならない場合もあれば、介在すると意味が変わってしまう場合もある。

- (21) a. \*マーク・トウェインが言った《天国にはユーモアがない》言葉には、思わずこちらをニヤリとさせるような真実味があります。  
b. マーク・トウェインが言った《天国にはユーモアがない》という言葉には、思わずこちらをニヤリとさせるような真実味があります。

[cf. 加藤 2003: 231, (99)]

- (22) a. 展示室の中央にあるベンチに腰を下ろした。  
b. #展示室の中央にあるというベンチに腰を下ろした。

[加藤 2003: 230, (100)]

命題内容を表す名詞は、いずれも限定されないまま単独で意味を伝えられないという点で、西山（1990）が非飽和名詞と呼ぶものに近い性質を持っており、命題内容を表す名詞も、位置関係を表す名詞と同じく、非飽和名詞に分類されると、加藤（2003）は指摘している。

## 2.6. まとめ

以上、示してきたように、(1)のような節型連体格関係は、寺村（1977ab, 1980）では「外の関係」としてとらえられ、非常に詳しい分類を行なった加藤（2003）においても、単にタイプ⑨の1つとして、他のタイプの連体修飾節と区別されずに扱われてきた。

- (1) a. [女子大生が彼氏にしたい]大学  
b. [x 軸と曲線で囲まれた]面積

次の章では、節型連体格関係をより明示的にとらえることのできる分析を提案したい。

### 3. 提案

#### 3.1. 連体修飾節内の主要部内在型関係節

まず、次の(23)のような連体修飾節を見てほしい。

- (23) a. [メアリーがカレーを食べた]残り  
b. [ジョンが本を買った]代金  
c. [ビルが喧嘩をふっかけた]相手  
d. [火が鉄を溶かした]温度  
e. [太陽が地球を照らす]光

ここで注目してほしいのは、(23)が(24)のような意味を表わしているということである。

- (24) a. [メアリーが食べた]カレーの残り  
b. [ジョンが買った]本の代金  
c. [ビルがふっかけた]喧嘩の相手  
d. [鉄を溶かした]火の温度  
e. [地球を照らす]太陽の光

(24)では「カレー」「本」「喧嘩」「火」「太陽」が関係節の主要部になっているのであるから、(23)の連体修飾節の中にある「カレー」「本」「喧嘩」「火」「太陽」も関係節の主要部であると考えれば、(23)と(24)が同じ解釈になることが導かれる。(23)の連体修飾節は、関係節の形をしていないが、日本語には、主要部内在型関係節 (head-internal relative : HIR) というものがあることが知られている。すなわち、(23)は次のような構造なのである。

(以下、主要部内在型関係節を HIR、主要部内在型関係節の主要部を HIR-head と記すことにする。)

- (25) a. [NP<sub>[HIR]</sub> メアリーが カレー<sub>(HIR-head)</sub> を 食べた][N 残り]  
b. [NP<sub>[HIR]</sub> ジョンが 本<sub>(HIR-head)</sub> を 買った][N 代金]  
c. [NP<sub>[HIR]</sub> ビルが 喧嘩<sub>(HIR-head)</sub> を ふっかけた][N 相手]  
d. [NP<sub>[HIR]</sub> 火<sub>(HIR-head)</sub> が 鉄を 溶かした][N 温度]  
e. [NP<sub>[HIR]</sub> 太陽<sub>(HIR-head)</sub> が 地球を照らす][N 光]

本論文では、(25)のように、節型連体格関係とは、連体修飾節が主要部内在型関係節になっている場合であると分析する。主要部内在型関係節は、全体が節になっているため、

主名詞を修飾していても、格助詞の「の」が出現しない。しかし、その主要部は名詞なのであるから、意味解釈上は、連体格関係と同じになるのである。

(25)に示すように、節型連体格関係の場合、主要部となる名詞は、ヲ格名詞の場合もあればガ格名詞の場合もある。また、次節以降で示すように、主要部となる名詞の格は、ガとヲに限らない。さまざまなタイプの項が主要部となりえる、非常に生産的な構文なのである。

### 3.2. 潜在的な主要部内在型関係節

このように考えると、1章で指摘した(1)の例文についても、(4)と同義であるということがうまく説明できる<sup>1</sup>。

- (1) a. [女子大生が彼氏にしたい]大学  
b. [x 軸と曲線に囲まれた]面積
- (4) a. 女子大生が彼氏にしたい男性の大学  
b. x 軸と曲線で囲まれた部分の面積

つまり、次のように考えるのである。

- (26) a. [NP<sub>[HIR]</sub> 女子大生が  $\phi$  (HIR-head) 彼氏にしたい][N 大学]  
b. [NP<sub>[HIR]</sub> x 軸と曲線に  $\phi$  (HIR-head) 囲まれている][N 面積]

ここで $\phi$ は、関係節の主要部となる名詞であるが、主要部であろうとも、主要部内在型の場合には、普通の名詞句と同じ形式であるから、通常の文の構成素の場合と同様、空範疇になっても不思議ない。なぜ空範疇にしたほうが容認性が上がるのかについてはわからないが、(1)は次の(27)と同じ構造だと考えたいのである。

- (27) a. [NP<sub>[HIR]</sub> 女子大生が (その) 男性<sub>(HIR-head)</sub>を 彼氏にしたい][N 大学]  
b. [NP<sub>[HIR]</sub> x 軸と曲線に (その) 部分<sub>(HIR-head)</sub>が 囲まれている][N 面積]

以下、(26)のように、主要部内在型関係節の主要部となる名詞が空範疇になっている場合を潜在的な主要部内在型関係節と呼ぶことにする。

このように、潜在的な主要部内在型関係節を仮定することで、(1)のような節型連体格関係

---

<sup>1</sup> この構文の特異性について注目したのは筆者であるが、(1a, b)の例文は、戸次大介氏（お茶の水女子大学）と川添愛氏に指摘してもらったものである。

をうまく説明することができる。

### 3.3. 多義的な連体修飾

このように分析すると、次の例文で2通りの解釈があることについても、明示的な説明が可能である。

- (28) [ジョンが向かった]先は崖であった。
- ジョンは崖に向かっていた。
  - 崖はジョンが向かっていたところよりも遠いところにある。
- (29) [文字が書かれている]裏にシールが貼ってある。
- 裏面に文字が書かれてあり、その同じ面にシールが貼ってある。
  - 文字が書かれている面とは逆の面にシールが貼ってある。
- (30) [トムが担当して塗った]端はまだ湿っていた。
- トムは全体の中で端っこを担当して塗り、そこが湿っている。
  - トムが塗った箇所の端が湿っている。

(28)–(30)の(b)の意味は、次の(31)の文が持つ意味と同じになっている。

- (31) a. [ジョンが向かった]ところの先は崖であった。
- b. [文字が書かれている]面の裏にシールが貼ってある。
- c. [トムが担当して塗った]箇所の端はまだ湿っていた。

このことから、(28)–(30)の連体修飾は節型連体格関係としての解釈が可能であり、(b)の意味解釈については、3.1節と3.2節での分析から説明が可能である。一方で、(a)については、連体修飾は節型連体格関係となっておらず、構造的に連体修飾節が主名詞を直接に修飾しているのである。

以上、連体修飾節が主要部内在型関係節（さらに、時には潜在的な主要部内在型関係節）になっているという分析を提案した。

## 4. 主要部内在型関係節の分析

残る問題は、主要部内在型関係節そのものをどのように分析すればいいかということである。しかし、この問題は容易ではない。以下に示すように、これまでの主要部内在型関係節の分析は、すべて(32)のようなタイプのものしか扱ってきていないため、「の」の存在に依存した分析となっている。

(32) ジョンは[<sub>HIR</sub> リンゴが机の上においてあるの]を取って食べた。

本論文では、主要部内在型関係節の新たな分析までは提案できないが、以下、先行研究における分析を紹介しておく。

### 4.1. Harada (1973)

#### 4.1.1. *tokoro-complement*

Harada (1973) は、次のような構文を *tokoro-complement* と呼び、これが「警察は逃げていく泥棒を捕まえた」と同じ意味になっているということを指摘した。

(33) 警察は [[その泥棒が逃げていく]ところ]を捕まえた。

[Harada 1973: 159, (7)]

この *tokoro-complement* とは、現代から見れば、明らかに主要部内在型関係節の 1 つである。

ここで extra NP が表層形にはっきりと現れる次のような文は非文である。

(34) \*警察はその泥棒を逃げていくところを捕まえた。

[Harada 1973: 161, (9)]

Harada (1973) は、その説明として、次のような規則を提案した。

(35) Counter Equi

主文の名詞句は、もしそれが補文の主語と同一であれば削除する。

[Harada 1973: 159, (6)]

#### 4.1.2. 分裂文

(36)と(37)の説明には、extra NP を想定してもしなくても派生してつくることができる。

(36) 警察がその泥棒を捕まえたのは、(そいつが) 逃げていくところ (を) だった。



[Harada 1973: 162, (10)]

- (37) \*警察がその泥棒が捕まえたのは、(そいつが)逃げていくところ(を)だった。

[Harada 1973: 162, (10)]

Extra NP を想定しないと、次の例文が非文になる説明ができない。

- (38) \*警察がその泥棒を(そいつが)逃げていくところを捕まえた。

[Harada 1973: 163, (11)]

#### 4.1.3. 受動文

(33)を受け身にすると(39)になる。(39)の文に「自分」を入れた(40)の文は多義的にならないので、直接受身だということがわかる。

- (39) その泥棒は警察に、逃げていくところを捕まえられた。

[Harada 1973: 164, (12)]

- (40) その泥棒は花子に、自分の家の方向へ逃げていくところを捕まえられた。  
(自分=泥棒、\*自分=花子)

[Harada 1973: 166, (19)]

Extra NP を仮定しなかった場合、受動文にすると容認不可能となる。

- (41) \*その泥棒が逃げていくところは、警察に捕まえられた。

[Harada 1973: 167, (20)]

しかし、次の例は NP-complement が名詞化しており、extra NP を仮定しなくても容認可能である。

- (42) みんなは[国鉄のストが今日ある]ことを知っている。

[Harada 1973: 167, (21)]

- (43) 国鉄のストが今日あることはみんなに知られている。

[Harada 1973: 167, (22)]

(43)が容認可能でも、次は容認不可能である。このように、Extra NP を仮定しない分析では、TC sentence から受け身をつくる操作の一般化ができない。

(44) \*国鉄のストはみんなに今日あることを知られている。

[Harada 1973: 167, (23)]

#### 4.1.4. 自動詞の場合

自動詞文でも、*tokoro-complement* は現れる。このことは *tokoro-complement* が直接目的語ではなく、副詞句の一種であることを示している。

(45) その泥棒は逃げていくところを警察に捕まった。

[Harada 1973: 168, (24)]

しかし、(45)はもともと自動詞ではなく、次と同じ構造を持つとも考えられるかもしれない。

(46) その泥棒は、逃げていくところを警察に捕まえられた。

[Harada 1973: 169, (25)]

しかし、まったく同じ構造ではない。

(47) 太郎は死にそうになったところを助かった。

[Harada 1973: 170, (27)]

(48) 太郎は死にそうになったところを医者に助けられた。

[Harada 1973: 170, (28)]

(49) \*死にそうになったところは、太郎に助けられた。

[Harada 1973: 170, (29)]

No extra NP だと主文の動詞がとる補文の NP を制限する規則を立てないといけないのに対し、Counter Equi だと(50)のような非文を(51)から導くことができる。

(50) \*警察は雨が降っているところを捕まえた。

[Harada 1973: 172, (30)]

(51) \*警察は雨を捕まえた。

[Harada 1973: 172, (31)]

## 4.2. Kuroda (1992)

### 4.2.1. 'Pivot independent relative clause'

Kuroda は、関係節の表層構造に言及したいという理由と、'headless relative clause'を表層構造の説明に用いると、Kuroda が考えるよりも広い意味での関係節として受け取られてしまうという、二つの理由から'headless relative clause'を'pivot-independent relative clause'と呼ぶ。

主辞内在型関係節は現代日本語と古典日本語の両方に見られる。現代日本語にはごくわずかしかみられないが、平安時代の古典に多く見ることができる。

### 4.2.2. 古典日本語

(52)は、一般的な古典日本語の pivot-independent relativization の形式である。C は関係節の意味的主要部であり主辞である名詞句の構成素、u は格助詞あるいは副助詞、P は S の述部、v は P の連体形、w は主節名詞句の格助詞あるいは副助詞を表す。

C は文の先頭に来る主語あるいは主題、もしくは直接目的語である。

(52) ...[[[...C-u...P-v]<sub>S</sub>]<sub>NP-w</sub>]<sub>NP</sub>...

[Kuroda 1992: 118, (1)]

(53) a. [no, ga]

b. '...Kiyoge naru wonoko-no hosoyaka naru-ga, tatebumi moti-te isogi iku-koso, iduti naran-to miyure.' (*Makura*, p.259)

[Kuroda 1992: 129, (Ex.1)]

(54) a. [no, ni] and [no, ga]

b. 'suigai-no ramon, noki-no uhe-ni, kai-taru kumo-no su-no turanuki-taru-yau naru-koso, imiziu ahare-ni wokasi-kare.' (*Makura*, p.184)

[Kuroda 1992: 129, (Ex.3)]

(55) a. [no,  $\phi$  o]

b. 'Daini-no Menoto-no, itaku, wazurahi-te, ama-ni nari-ni-keru, toburahan-to-te...' (*Genzi*, vol. 1, p.123)

[Kuroda 1992: 132, (Ex.5)]

- (56) a. [PRO<sub>s</sub>, ga]  
b. 'Mitinoku-no kami-no me-ni nari-te, kudari-ni-keru-ga, hito-tose, nobori-te,...' (*Genji*, vol. 5, p.99)

[Kuroda 1992: 139, (Ex.13)]

#### 4.2.3. 現代日本語

(57)は、現代日本語の pivot-independence relative の形式である。V は述部、例えば、動詞、形容詞などであり、u は連体形、no は名詞化辞を表している。

- (57) ((...V-u)<sub>S</sub>-no)<sub>NP</sub>

[Kuroda 1992: 146, (1)]

P.-i. relative clause は、主節の語用論的要素と直接の関係を持っていない場合、その文は容認されない。例えば、(58)の関係節は、太郎がリンゴをどこで取ったのかがわかるのに十分な情報を表している。

- (58) Taroo wa ringo ga sara no ue ni atta no o toote, poketto ni ireta

[Kuroda 1992: 147, (3)]

- (59) \*Taroo wa Hanako ga kinoo ringo o katta no o totte,...

[Kuroda 1992: 147, (5)]

関係節内は、主節が言及している時間と同じでなければならない。

- (60) \*Taroo wa kesa, ringo ga kinoo sara no ue ni atta no o totte,...

[Kuroda 1992: 148, (9)]

- (61) Taroo wa kesa, kinoo sara no ue ni atta ringo o totte,...

[Kuroda 1992: 148, (10)]

次の(63)は、kinoo があるために同時的な解釈はできない。

- (62) Taroo wa Hanako ga ringo o sara no ue ni oita no o totte,...

[Kuroda 1992: 148, (11)]

(63) \*Taroo wa Hanako ga kinoo ringo o sara no ue ni oita no o totte,...

[Kuroda 1992: 148, (12)]

しかし、(64)のように補助動詞 oita を入れると、容認可能になる。

(64) Taroo wa Hanako ga kinoo ringo o sara no ue ni oite oita no o totte,...

[Kuroda 1992: 149, (15)]

通常の関係節では、直接的な関係は要らない。

(65) Taroo wa Hanako ga sara no ue ni oita ringo o totte,...

[Kuroda 1992: 150, (16)]

次の(66)は時間的・場所的に(59)と同じだが、故意的である (oita がある) という点で(59)よりも容認性が高いと Kuroda は考えている。

(66) ?Taroo wa Hanako ga (kinoo) ringo o katte oita no o totte,...

[Kuroda 1992:150, (17)]

### 4.3. Uchibori (1991)

#### 4.3.1. 束縛による分析

Uchibori (1991) では、移動による主要部内在型関係節構造の分析では説明できない現象があるとして、空演算子の束縛による分析を行った。

(67)  $[_{NPi}[_{CPi} Op_i [_{IP} \text{リンゴが皿の上においてある}]][_{NPi} \text{の}]]_i$  を取って食べた。

[Uchibori 1991: 84, (8)]

#### 4.3.2. 観察と説明

主要部内在型関係節は、主要部である名詞句が関係節の中に現れ、その関係節は「の」を伴って主節の動詞が要求する位置にある。

(68) 太郎が[リンゴが皿の上に置いてあるの]を取って食べた。

[Uchibori 1991: 81, (1)]

一方で、主要部外在型関係節は、主要部である名詞句は関係節の外にあり、その主要部である名詞句は関係節と接している。

(69) 太郎が<sub>[NP 皿の上に置いてある]</sub><sub>[NP リンゴ]</sub>を取って食べた。

[Uchibori 1991: 81, (2)]

主要部内在型関係節は副詞節だと見なされることがある。

(70) 太郎が<sub>[リンゴが皿の上に置いてあるの]</sub>と<sub>[皿の上のミカン]</sub>を取って食べた。

[Uchibori 1991: 81, (3)]

しかしながら、(70)からわかるように、「と」を伴って他の名詞句と等位接続が可能であるため、主要部内在型関係節は名詞句であることがわかる。

次の主要部内在型関係節は、それぞれ(71a)直接目的語、(71b)間接目的語、そして(71c)付加詞を主要部としており、容認可能な文となっている。

(71) a. 警官が<sub>[不審な男が子供にお菓子を与えようとしているの]</sub>を取り上げた。

[Uchibori 1991: 82, (4a)]

b. 警察が<sub>[不審な男が子供にお菓子を与えようとしているの]</sub>を保護した。

[Uchibori 1991: 82, (4b)]

c. 花子は (危ないので) <sub>[赤ん坊がハサミで遊んでいるの]</sub>を取り上げた。

[Uchibori 1991: 82, (4c)]

この例文(71)は、Ishii (1988) で言われた、「主要部内在型関係節の主要部である名詞句は関係節の主語と一致しない文は容認不可能である」とする主張の反例となっている。

主要部内在型関係節は WH-island の制約に違反して、WH-island の中でも起こる。

(72) a. 警察が<sub>[太郎が誰が金を盗んだか]</sub>知りたがっていたの(と<sub>[もう一人の強盗]</sub>)を(両方)捕まえた。

[Uchibori 1991: 83, (6a)]

主要部内在型関係節では、主要部である名詞句は不定でなければならない。

(73) [政治家が汚職したの]と[その派閥の若手]が次の選挙には落選した。

[Uchibori 1991: 83, (7a)]

不定名詞句は量化子の作用域にあるとき、その量化子によって束縛され、変項として適切な解釈を得る。そのため、もし文中に明白な量化子がないならば、存在量化子が induce される。

Heim (1982) では、関係節において不定の名詞句は束縛変項として適切に解釈される必要があると分析している。主要部内在型関係節において null operator を想定すれば、意味的に null operator が存在量化子として働くことを仮定できる。

主要部内在型関係節では、主要部としての名詞句の解釈は一つ以上ある。次の例文では、「三人の」があるため、どの三人なのかわかる。

(74) 通行人が[巡査が泥棒を川の方へ追い詰めていったの]と川釣りをしている子供を、誤って三人とも川に突き落とした。

[Uchibori 1991: 86, (11)]

しかし、次の例の解釈は多義的である。

(75) 橋のところで通行人と巡査が協力して泥棒を追い詰めてもみ合っていたのと川釣りをしていた子供が、衝突して川の中に落ちこちた。

[Uchibori 1991: 87, (12)]

これら二つの例は、主要部内在型関係節において、全ての不定名詞句は与えられた文脈の中で正しく解釈されなければならないことを示している。

## 5. おわりに

本論文では、(1)のような節型連体格関係が、なぜ(4)と同様の解釈をされるかという問題について論じてきた。

- (1) a. [女子大生が彼氏にしたい]大学
- b. [x 軸と曲線で囲まれた]面積
  
- (4) a. 女子大生が彼氏にしたい男性の大学
- b. x 軸と曲線で囲まれた部分の面積

本論文の提案は、(1)の構造が(26)のようになっているということである。

- (26) [NP<sub>[HIR]</sub> 女子大生が  $\phi$  <sub>(HIR-head)</sub> 彼氏にしたい][N 大学]]

すなわち、連体修飾節そのものが主要部内在型関係節であり、かつ、その主要部が空範疇になっている。このように仮定すれば、(1)が通常の関係節を含む(4)と同様になることは、当然、帰結する。この分析で、(1)以外にも、次のようなさまざまな例文が説明できるということを示した。

- (23) a. [メアリーがカレーを食べた]残り
- b. [ジョンが本を買った]代金
- c. [ビルが喧嘩をふっかけた]相手
- d. [火が鉄を溶かした]温度
- e. [太陽が地球を照らす]光
  
- (76) a. [ジョンが向かった]先は崖であった。
- b. [文字が書かれている]裏にシールが貼ってある。
- c. [トムが担当して塗った]端はまだ湿っていた。

広く知られているように、日本語には主要部内在型関係節が存在するのであるから、(26)のような位置に現れても不思議はない。しかし、従来、主要部内在型関係節といえ、(32)のように、「の」と格助詞が後続するものしか論じられてこなかった。

- (32) ジョンは<sub>[HIR]</sub> リンゴが机の上においてあるの]を取って食べた。



これに対して、(26)のように名詞に直接先行する位置にも主要部内在型関係節が生起できるとなると、これは主要部内在型関係節の分析に対して大きな発見となる。従来の主要部内在型関係節の分析は、どれも「の」の存在に依存したものになっているため、この発見は、まったく新しい方向から主要部内在型関係節を分析する必要があることを示しているのである。

本論文では、主要部内在型関係節の詳しい分析までは扱えなかった。その分析を考えることが今後の課題である。

## 参照文献

- 井上和子 (1976) 『変形文法と日本語・上—統語構造を中心に』 東京: 大修館書店.
- 加藤重広 (2003) 『日本語修飾構造の語用論的研究』 東京: ひつじ書房.
- 寺村秀夫 (1977a) 「連体修飾のシンタクスと意味—その2—」 『日本語日本文化』 大阪外国語大学研究留学生別科. 寺村秀夫 (1992) 『寺村秀夫論文集 I—日本語文法編—』 東京: くろしお出版, 261–296 に再掲.
- 寺村秀夫 (1977b) 「連体修飾のシンタクスと意味—その3—」 『日本語日本文化』 大阪外国語大学研究留学生別科. 寺村秀夫 (1992) 『寺村秀夫論文集 I—日本語文法編—』 東京: くろしお出版, 261–296 に再掲.
- 寺村秀夫 (1980) 「名詞修飾部の比較」 國廣哲弥 (編) 『日英語比較講座 2 文法』 東京: 大修館書店, 221–266.
- 西山佑司 (1990) 「「カキ料理は広島が本場だ」構文について--飽和名詞句と非飽和名詞句」 『慶應義塾大学言語文化研究所紀要』 22: 168–188.
- Harada, S. I. (1973) Counter Equi NP Deletion. *Annual Bulletin* 7: 113–147.
- Kuroda, S -Y. (1974) Pivot-independent Relativization in Japanese I. *Papers in Japanese Linguistics* 3: 59–93. Reprinted in Kuroda, S. -Y. (1992) *Japanese and Semantics*. Dordrecht: Kluwer Academic Publishers, 114–174.
- Kuroda, S -Y. (1975) Pivot-independent Relativization in Japanese II. *Papers in Japanese Linguistics* 4: 85–96. Reprinted in Kuroda, S. -Y. (1992) *Japanese and Semantics*. Dordrecht: Kluwer Academic Publishers, 114–174.
- Kuroda, S -Y. (1976) Pivot-independent Relativization in Japanese III: Types of Japanese Relatives. *Papers in Japanese Linguistics* 5: 157–179. Reprinted in Kuroda, S. -Y. (1992) *Japanese and Semantics*. Dordrecht: Kluwer Academic Publishers, 114–174.
- Uchibori, Asako (1991) Head-internal relatives in Japanese. *Proceedings of the Fifteenth Annual Meeting of the Kansai Linguistic Society* 11: 81–90.

## 謝辞

本論文の執筆にあたり、指導教官である上山あゆみ先生には丁寧な指導をしていただきました。ご多忙の中、大変遅い時間まで面談やメールでのやり取りをしてくださいました。言語学の知識のみならず、言語学に関連した諸分野の様々な知識についてご教授くださり、知見を広めることができました。この場を借りて深く感謝申し上げます。また、九州大学言語学研究室の久保智之先生、下地理則先生、太田真理先生には、私が編入してきた時から講義、講義外の時間を問わず、手厚い指導をしていただきました。心より感謝申し上げます。そして、お茶の水女子大学理学部情報科学科の戸次大介先生と川添愛氏には本論文で用いる例文について貴重なご指摘をしていただきましたこと、深くお礼申し上げます。